

大学と保護者の相互理解と協働が 大学・学生にもたらすもの

わが子の大学選びや就職活動に積極的に関わる保護者が多くなった現在、大学と保護者がどのように関わっていけば、学生の成長と幸福を支援することができるのか。大学職員と保護者がそれぞれの立場から経験と考えを語り合い、協働の可能性を探った。各発言の要旨を紹介する。



●聖学院大学広報局長
大学広報部長
山下 研一氏



●立正大学学長室政策広報課
政策広報担当課長
渡辺 紀子氏



●保護者
鳥居 りんこ氏



●保護者
佐治 瑞恵氏

●司会 編集部

大学選びへの保護者の関与

わが子の進路決定を 積極的に支援すべき時代

司会(編集部) 保護者のお二人は、お子さんの大学選びにどう関わったか。

鳥居 1浪の末、長男を大学に入れた。名のある大学に進学させたくて、それなりの費用をかけて中高一貫校に通わせたが、勉強好きにはならず、やりたい職業も見つからない。

当時は「有名大学に行くことが私と子どもの幸せ」「大卒でなければ人生は終わり」と思っていたので、浪人中も様子が変わらない息子を見て焦り、躍起になって大学の情報をネットで検索した。

本人の学力を考えても、当初は目を向けることもなかった入試難易度の大学の中で検討せざるを得なかった。息子に向いていると思える学部を見つけ、その中から知名度と社会的実績が

ある1校に固執し、保護者による記入が認められている願書を出したり、その大学の良さを息子に吹き込んだりして、何とか入学させた。

今となっては、進学意識や知識欲をもっと早くから育てるべきだったと反省している。そのことの大切さに気づかないまま、「進学できなければ生きていけない」と追い詰められている保護者は大勢いると思う。

佐治 長男は理系だったが、高3の夏に「やっぱり理系はダメだ」と言い出し、文転した。高校の先生に「大学受験は情報戦。情報は保護者が集め、子どもは勉強に専念させてほしい」と言われて高2から大学案内を集めていたが、ゼロからやり直し。このとき初めて、「親の私がかんばらなくては」と思った。

一緒に7、8大学を見学した。オープンキャンパスが終わっていた大学には、私が電話をして見学を申し込ん

だ。われながら過保護だと思ったが、息子は校舎などの外見で良し悪しを判断しがちだとわかっていたので、校風や授業スタイルが息子に合うかどうかを私が判断した。

司会 大学側は、保護者の関わり方をどのように見ているのか。

山下 本学の今年のオープンキャンパス参加者のうち、半分は保護者と一緒に、同伴率は過去最高だった。ここ1、2年は両親が共に参加するケースがめだっている。これを過保護だとは思わない。

オープンキャンパスには学生募集だけでなく、大学と受験生が互いのことをよく知ってミスマッチを防ぐという目的がある。「大学は何をやり、何ができないのか」を伝え、保護者の責任を自覚してもらおう。その大学と一緒にわが子を育てていけるか判断するためにも、保護者が一緒に話を聞くのはいいことだ。社会・経済の状況が厳し

い現在、保護者と高校・大学が力を合わせ、進学や就職における選択を積極的に支援すべきだと思う。

渡辺 保護者が受験生だった頃とは大学もまったく違うので、オープンキャンパスなどで今の大学を知ってもらうのは大歓迎。保護者と子どもが共通の価値観を持って進学先を選ぶのは大切なことだ。

ただ、保護者はあくまでサポート役であるべき。多くの保護者から、特に就職に関しては並々ならぬ熱意を感じるが、最終的には、本人の意思で進路を決めてほしい。

大学・学部選びで重視する点

たどり着いたのは 相性や夢中になれること

司会 お子さんの大学・学部を選ぶときに重視した点は？

佐治 息子は高3まで理系の勉強をしていたので、理系の学部のほうが入試難易度の高いところに行けるのにと、正直、文転を残念に感じた。私の社会人経験から、仕事の能力と出身大学の入試難易度とは、ある程度は比例するという見方が、事実として世の中には



さじみずえ 社員。長男が首都圏の私立大学、長女が首都圏の国立大学に在学中。

大学選びが成功したと思えるのは、うまく就職が決まったからではなく、本人がとても楽しそうだから。———佐治氏

わが子が夢中になれるものがわかるから 大学選びに関わり正解を見つけられた。 今、息子は意欲的に学んでいる。———鳥居氏

あると感じる。だから大学のブランドに強いこだわりがあった。

しかし、そこにこだわって息子が嫌がることをやらせるのは本末転倒だと考え直した。親として一番の望みは、4年間きちんと通い、卒業すること。だから、息子の文系の学力でねえ、本人が希望する福祉を学べる大学を探した。そのうえで、真面目そうな学生が多く、少人数教育を重視していることなど、息子に合っていると思う条件を考え、大学見学でチェックした。

山下 同じ入試難易度の大学でも、キャンパスの雰囲気や授業スタイルはさまざまなので、本人との相性を見ることはとても大事。良い選び方をされたと思う。

鳥居 私の息子の場合、当初、本人が希望していたのは経済・経営系の学部だった。息子に向いているようには思えず、入学できて挫折すると直感した。

何を学べばわが子が立ち立てるのかを必死で考え、調べた結果、たどり着いたのは情報系。息子はゲームやパソコンが好きで、一日中やっても飽きない。何度も止めさせようとしたが、これこそ息子が夢中になれることなのだと考えを改めた。情報系の学部に入学した結果、毎日楽しそう、やりがいを持って学んでいる。

親なら、本人が何に夢中になれるかわかる。息子の資質を伸ばせる大学を選んで正解だった。大事なのは、入試難易度でも知名度でも就職率でもない



とりいりんこ 中学受験をテーマにするエッセイスト。長男が首都圏の私立大学、長女が首都圏の公立大学に在学中。

と、今は思う。

山下 お二人の話聞いて、わが子に合う大学を一生懸命に探す保護者の切実さを、われわれ大学側はきちんと理解できていないと感じる。

理解している、声を聞いている“つもり”になっていただけのようだ。結局、大学側は以前から何も変わっていないのかもしれない。

渡辺 学生やその保護者から就職の相談を受けていると、「大企業でなくて、みんなが知っている企業でなくて」という固定観念が強いように感じる。何をやりたいかという意味を持ち、それが実現できる就職先を選んでほしい。

志望校を選ぶのも同じで、入試難易度や従来のブランドではなく、学びたいことが何か、自分を伸ばしてくれる大学かどうかを見るべき。学びたいことが途中で変わったときも、新たな道と一緒に考えてくれる大学に良さを感じるようになると思う。

山下 ブランド大学に入れても何も身に付かず、就職できないこともあると保護者が気づきだした。

メディアが「面倒見の良さ」や「入学後にどれだけ能力を伸ばせるか」な

ど、大学の中身に関する情報を発信し始めたこともあり、人材育成力という従来とは異なる基準に注目が集まり始めている。

そこから大学選びが変わる可能性もあり、中堅以下の大学にとってはチャンスと言えるのではないか。

大学の情報発信の課題

4年後の成長ぶりを 思い描ける情報が欲しい

司会 保護者として、大学の情報発信をどう評価するか。

佐治 大学案内は、大学が見せたいきれいな部分だけを載せているという印象だ。デザインや文章が前年のものと全く同じだと、改革にあまり力を入れていないのかと感じる。

1年次から少人数教育の授業があるのも、私たちの頃とは違うので、こういった教育体制を大学案内にはっきり書いてほしかった。

鳥居 ウェブサイトも大学案内も相当見たが、欲しい情報はほとんどなく、イメージ重視のカタカナ語や専門用語ばかりで非常に困惑した。抽象的な言葉ばかりで、どんな人を育てて社会に送り出したいのかわからない。

教育内容や就職データが、わかりやすく公表されていない大学は、それだけで「知られたくない事情」があるのかと疑ってしまう。

息子の学生生活の充実ぶりを見てみると、入試難易度の高い大学に入ることが必ずしも本人の幸せにつながるわけではないと思うようになった。入試難易度とは違う、それぞれの大学の良さを親が見いだすには、情報を誰が見てもわかるように公表すべき。そうしないと、後々、本人の適性とのギャップに苦しむ家庭が増えるだろう。

山下 教育成果は、一人ひとり感じ方が違う。一部上場企業に何人入ったか、社長になる人材を何人出したかと

いう数字で測れるものではない。

教育成果を判断する基準は、学生の満足度、幸福度だと考えている。これらは主観的なもので、何らかの物差しで測って標準化することはできない。そのため、大学にとってはアピールが難しく、従来の広報では十分に伝えられていなかった。

一方で、学生本人に最も近い存在である保護者にとっては、わが子の様子を見れば、教育成果が上がっているかわかるかと思う。

満足や幸福を感じている学生の保護者から、それが大学の何によってもたらされているか、情報を発信してもらおう手法を考えてみたい。

佐治 山下さんの話を聞きながら、なぜ私は息子の大学選びに満足しているのだろうと考えていた。

今までは、就職が決まったからだと思っていたが、本人が楽しそうに大学に通っていることが最大の要因だったのだと気づかされた。確かに私たちは入試難易度や就職率などの数値的な基準に頼りがちだが、4年間をわが子がどう過ごし、どんなふう成長して卒業するのかを思い描けるような情報が大学からもっと発信されれば、そこに共感して、「この大学にわが子を入れたい」と思う人がきっと出てくると思う。

渡辺 本学のオープンキャンパスでは受験生の保護者に対して学生が主体的に大学のことを紹介している。こうした姿から、学生が入学後どのように成長し、大学のどこに満足しているのかを想像してもらえるのではないかと。

本学は入試難易度の高い大学ではないが、縁あって入学した学生には、誇りを持って卒業してほしい。ここで過

ごす4年間に満足してもらうために、意欲を育て、力を伸ばすためのチャンスを他大学以上に提供しているつもりだ。そうした私たちの思いを、受験生の保護者をはじめ社会にもっと強く訴えていく必要性を感じる。

学生の保護者と大学との関係

就職活動に関する情報を積極的に保護者と共有

司会 立正大学と聖学院大学では、在学生の保護者との相互支援や協働をどう進めているか。

渡辺 在学生の保護者による大学支援組織として、「橋父兄会」がある。この保護者組織が、学術、スポーツ、ボランティアなどの各種活動で功績のあった学生や学生団体を選んで表彰し、奨励金を贈る「橋父兄会奨励賞」は、2012年度で17回を数える。保護者が、学生を讃え励ますことによって教育を支援してくれている。

全国各地での教職員と保護者との懇談会の他、キャリアサポートセンターの協力による「父母のための就職講座」も橋父兄会が開催している。保護者の視点から大学、学生の活動を紹介



わたなべのりこ これまで、学生部や企画広報室などの業務を担当してきた。

学生の力を伸ばす多くの機会を提供したい。
この思いを保護者に届けるための工夫が必要だと感じる。———渡辺氏

する機関紙も発行している。そこに、「父母のための就職講座」の講演内容を、ポイントを整理して掲載していただいている。これによって、当日、聞きにこられなかった人にも、学生の就職活動をこんなふうに支えてほしいという大学のメッセージを伝えることができる。

本学は就職支援における保護者との連携を重視しており、現在の社会状況を理解したうえでサポートをしてもらうために、保護者向けのキャリア読本を作成した。

山下 本学も、保護者の組織である後援会を対象に毎年秋に行っている「企業と大学の就職懇談会」に、2010年度から大学側のスタッフとして後援会に加わっていただいて、企業の人事担当者と懇談できるようにした。子どもを一人前の社会人に育てていくうえで、目標とすべき方向や身に付けさせたいスキルが何なのか、本当に熱心に聞いている。

私たちは以前は、学生の就職に保護者が過剰に関わるのは良くないと考えていた。しかし、リーマンショック以降の就職難を目の当たりにして、考え方を変えた。大学と保護者が力を合わせて学生の未来を考えていこうと。この考えを具体化するため、企業の手を直接、保護者に届ける場を提供していきたい。

鳥居 息子の大学はお二人のお話のように、教員との面談や就職活動に関する情報を得る場が用意されており、保護者に対するケアが手厚い。私も研究室の担当教員と何度か話して親しくなった。息子を褒めるばかりでなく、直すべきところを的確に指摘してくれるので、息子のことをよくわかって指導しているのだと安心できる。

一方、娘の通う公立大学は、昔ながらの自主自律の精神にのっとり、保護者への情報提供はほとんどない。ただし娘の様子から、自治体が予算を掛け

わが子の幸福を切実に願う保護者は 大学を良くするための強力なパートナー。 協働が新たな価値を生み出す。———山下氏

て、質の良い教育を行っていることはわかる。

どちらが良いということではなく、それぞれに合っているところを選んだと思う。

これからの協働の方向性

わが子の成長の実感が 広報を応援する姿勢に

司会 今後の大学と保護者の協働について、それぞれのご意見を。

鳥居 勉強嫌いだっただけで、「毎日大学に行くのが楽しい」と言い、内定が取れた後も、「もう少しがんばる」と就職活動を続けている。

保護者として、息子の成長が心の底からうれしい。一人ひとりの力を伸ばして可能性を広げてくれる大学との出会いは、本人にとっても保護者にとっても幸福だ。

一方で、多くの大学は自学の良さを伝えきれておらず、もったいない。入学前に知りたかったことや、入学後に知ったすばらしい点がちやんと伝わるよう、保護者目線の大学案内を作ってみたい。大学は私たちをもっと活用してほしい。

佐治 息子は充実した4年間を送り、2013年の春卒業する。「大学の広報に関わってほしい」と言われたら責任も重いので尻込みしてしまうかもしれないが、保護者同士の集まりで体験を話す程度のことならできそうだ。

卒業後は、卒業生とその保護者による後援会に入る予定。貢献というほどのことはできないだろうが、息子をここまで育ててくれた大学なので、長い付き合いにしたいと思っている。

渡辺 お二人のお子さんのように生き



やました・けんいち 一貫して入試広報を担当し、情報公表に力を入れる。

生きと学び、納得のいく就職先を見つけて卒業する幸福な学生を、本学でも今以上に増やしたい。就職について学生、保護者、大学が共に考える機会を拡大したいと考えている。

入学後の教育や生活についての保護者の意見はすでに懇親会等で聞いているが、受験前の情報提供に対する希望について、本音が聞ける場はこれまであまりなかった。今後はヒアリングに力を入れていきたい。

山下 わが子の未来について常に切実に考えている保護者は、大学を良くしていくうえで、強力な味方になってもらえる。子どもの成長を実感すれば「いい大学」と評価し、「無名なのは悔しい」と思って広報を応援してくれる。保護者との協働次第で、大学の魅力を高め、新しい価値を創り出す可能性は十分にある。

大学進学究極の目的は、幸せをつかむことだ。幸せとは、入試難易度や知名度など、社会が決めた指標ではなく、一人ひとりの価値観という指標で測られるべきもの。大学選びも就職も、「教育のプロたる大学」と「本人のことを熟知した保護者」との協働によって、幸せな結果に導きたい。